

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K04824

研究課題名(和文) 北宋、遼、金、元における宮廷空間の特質 宮殿、庭園の比較研究を中心に

研究課題名(英文) Palace complexes in the Bei Song, Liao, Jin and Yuan dynasties: comparative study of their palace architecture and garden

研究代表者

福田 美穂 (Miho, Fukuda)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授

研究者番号：50379046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：北宋、遼、金、元の宮廷空間について基礎的文献の初歩的な整理と読解、および調査をおこない、宮廷空間の理解にとって文化的アイデンティティーと生活習慣というアプローチが重要である事を確認した。

文化的アイデンティティーについてのケーススタディとして建築家Wang Da-hongを取り上げ、台北で開催された国際シンポジウムで発表した(2019年)。また、生活習慣のアプローチについては、当初計画した中国での調査をコロナのため断念し、日本民家における伝統的食住習慣について調査し、日本建築学会近畿支部にて発表した(2021年)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異民族の文化がどのような特徴を持ちえるのかについての考察は中国史に留まらず、世界全体に関係することである。したがって、世界文化史に貢献できる。

とくに建築史の分野では一般的傾向として、歴史史料を素材とする研究はとっつきにくく敬遠されがちであるが、解明すべきかつ興味深いテーマは多くあって研究の可能性は大きい。本研究は、理科系出身者であっても史的研究が可能であることを示して、爾後の研究を促すものである。

研究成果の概要(英文)：This study confirms that cultural identity and living style are important to understand the features of palace complexes in the Bei Song, Liao, Jin and Yuan dynasties. There are two presentations: Miho Fukuda, "What should Chinese Modern Architecture be? Wang Da-hong's Answer Projected in National Dr. Sun Yat-sen Memorial Hall, Symposium", 100 Years of Bauhaus, The Bauhaus and Taiwan -- Concepts of Modernism", Taiwan Normal University, 2019), Miho Fukuda et al., "The Way of Living in a Traditional House since 1950's: A Case Study of an Urban Dwelling Built in Osaka in Taisho Era," Architectural Institute of Japan Research Report Kinki Branch, 2021.

研究分野：建築学

キーワード：宮殿 庭園 北宋 遼 金 元

1．研究開始当初の背景

中国建築史では、皇帝に関係のある空間、たとえば都城、宮殿、皇室庭園についての研究は、ある種の王道と言える。理由は、中国文化の精髓と目され、かつ文字資料も比較的まとまって残されているからである。たとえば、北宋の呂大防が長安を描いた復元図は、建築史研究の成果ということができ、東アジアに建築史という研究分野がなかった前近代においてすら、長安という都市やその宮殿建築に関しては注目され研究されたのであった。

ただ、唐代を筆頭とする漢族宮廷建築文化の研究は早くから盛んであったのにたいして、漢族以外の、ことに遼代、金代、元代の宮廷空間の研究は、それほど注目されてこなかった（清朝では膨大な量の文字や絵画の資料だけでなく、宮殿建築も現存するものがあり、研究の様相は、他の異民族の空間の研究とは異なる）。しかし、中国史研究において、漢文化にのみ着目するならば、なにが漢族の特質であるのかは、むしろ見えにくい。異民族のそれと比較することによって、漢族、異民族双方の特色がより明確に浮かび上がってくるであろう。

2．研究の目的

本研究の対象は北宋、遼、金、元の宮廷空間にあった宮殿、庭園である。それらひとつひとつについて、文献資料を収集し、関連する絵画資料と考古資料もあわせて収集する。遼、金、北宋について、先に資料を収集し、元については博士論文であつかい、基本的な資料はすでに収集したので、さらなる資料の収集に努める。

収集した資料の読解を通じて、可能な限り宮廷の復元図を描く。復元図を描くにあたっては、絵画資料、考古学資料も同時に収集し建築、庭園空間について考察する。さらに、宮廷空間を設計し使用するにあたり、各時代のそれぞれの文化集団が持っていた空間観念、文化的アイデンティティ、そして生活習慣も重要であろう。したがって、それらの一端でも示す史料も収集、読解を行い、建物、庭園の位置に加えて、それらの使いかたを考察する。

3．研究の方法

本研究の対象は北宋、遼、金、元の宮廷空間にあった宮殿、庭園である。それらひとつひとつについて、文献資料を収集し、関連する絵画資料や考古資料もあわせて収集する。遼、金、北宋について、先に資料を収集し、元については博士

論文であつかい、基本的な資料はすでに収集したので、さらなる資料の収集に努める。

収集する文献記述には、二つの要素に注意して読解する。ひとつは宮殿や庭園の存在を示す、あるいは位置関係を示唆する記述である。もうひとつは、その宮殿や庭園で何をしたかを示す記述である。このように記述のふたつの要素に着目して、宮廷空間の物理的な位置関係とその使用法を明らかにする。そして、可能な限り宮廷の復元図を描く。

なお、宮殿や庭園で行われた行為については、各時代のそれぞれの文化集団が持っていた空間観念、文化的アイデンティティー、住生活習慣が重要であろう。したがって、それらの一端でも示す史料も着実に収集、読解を行う。

4. 研究成果

上述のような研究方法をもちいて、北宋、遼、金、元の宮廷空間について基礎的文献の初歩的な整理と読解、および調査をおこなった結果、文献読解の際に重視すべきアプローチを見いだすとともに、食住空間の習慣をできるだけ明らかにすることでより宮廷空間を理解できそうなことを確認した。以上のアプローチにより、局所的な復元図とその解釈を試みた。

まず、宮廷空間を理解するには、次のような二つのアプローチがとくに重要であることがわかった。

ひとつには、文化的アイデンティティーが空間設計と空間の使い方の基層をなしていることから、個別具体的な建築や庭園以外の記述に、文化的アイデンティティーに関連する記述を広く収集して検討しなければならないということである。このように文化的アイデンティティーに着目すると、宮廷空間の解釈をさらに深めることができる。たとえば、元の宮廷で多用される工字殿を理解する場合、文化的アイデンティティーを念頭に資料を検討した結果、次のように言うことができそうなことが今回判明した。それは、工字殿自体は元朝以前から存在したが、なぜ元朝宮廷でこれほど多用されたのかということ、元は宮廷内でもテントを使い続けたらしいこと、そしてテントには工字殿に類似する形状のものがあること、したがって木造とはいえテント空間の類似性から元の皇帝に好まれたのではないかと推測できるのである。

なお、文化的アイデンティティーの問題のケーススタディとして、Wang Da-hong という中国大陸出身の建築家を取りあげた。(Miho Fukuda, "What should Chinese Modern Architecture be? Wang Da-hong's Answer Projected in National Dr. Sun Yat-sen Memorial Hall, Symposium", 100 Years of Bauhaus, The

Bauhaus and Taiwan -- Concepts of Modernism", Taiwan Normal University, 2019)。彼は 12 才ごろに欧州へ渡り、以来欧米で教育を受けて建築家となったが、中国建築をどう認識していたか、いいかえれば自分の文化的アイデンティティをどう考えていたかを、その作品から推測した論考を台湾の国際シンポジウムで発表した。作品の分析してみると、中国建築特有である、「建築には等級の概念があり、社会的身分に応じた等級の建築を建てていた」という感覚はおそらく彼にはなかったこと、台湾政府から中国建築を近代化した建築を求められたものの、近代建築の一部中国風味という建築を設計することになった、と推測できそうである。このケーススタディは異民族の建築を考える上でヒントになると思われる。

ふたつめのアプローチは、生活習慣、生活様式に着目することである。宮廷空間の設計とその使用のしかたについて、それぞれの文化的集団が持つ生活習慣がかなり基層となっていると考えられるからである。

生活習慣あるいは生活様式については、コロナのため中国での調査を断念した。さいわい、日本の住生活空間調査の機会を得て、初歩的な調査報告を日本建築学会近畿支部でおこなった(福田美穂ほか「1950 年代以降の食住習慣からみた伝統的住宅の空間 大阪市の大正期の住宅を事例として」日本建築学会近畿支部報告、2021 年)。これによって将来の中国調査に備えることとした。この日本での調査は、大阪市北区にある大正期に建てられた住宅で食住生活習慣の聞き取りを実施したものである。この調査から、大阪梅田の近くにあるにも関わらず、伝統的な家屋が改造も少なく投象の様子をよく残しており、しかも住まい方も伝統的である事が判明した。たとえば、部屋の使い方、食事の作法、家族の着座位置、風呂を使う順番、正月にはなお蝶足膳を使用すること、江戸時代の文献に見られる年中行事のひとつが昭和 50 年代まで残っていたこと、などは古い住まい方を維持している。ちゃぶ台の導入が戦後であったことも象徴的である。こうした生活スタイルと伝統的空間は、密接に結びついていて、現在では廃れてしまった住まい方を見この家ではかなりセットになっていて、それが昭和、平成、令和と時代がかわるにつれて、家族のありよう、行事食、など多くの観点から食住生活を明らかにできた。こうした考察は今後の宮廷空間の読解にも役立つものと確信する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福田美穂、小伊藤亜希子、碓田智子、小池志保子、西川章江
2. 発表標題 1950年代以降の食住習慣からみた伝統的住宅の空間 大阪市の大正期の住居を事例として
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miho FUKUDA
2. 発表標題 What should Chinese Modern Architecture be? Wang Da-hong 's Answer Projected in National Dr. Sun Yat-sen Memorial Hall
3. 学会等名 100 Years of Bauhaus, The Bauhaus and Taiwan -- Concepts of Modernism (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------